

## 郷土資料館だより

V o 1. 22. No.1

1999. 11. 1



## 玄峰塔

「玄峰塔」は三島沢地の名利、龍沢寺(臨濟宗、白隠禅師開山)の中興の祖、山本玄峰老師の書による石塔です。

玄峰老師は、多くの名僧を育てる一方、戦前・戦後の政財界人の精神的支柱でした。特に終戦の折、鈴木貫太郎首相に戦争終結の知恵・「象徴天皇」のイメージを授けた話は有名です。

この「玄峰塔」は老師の生まれた湯の峰温泉東光寺に建っています。日本で最も古い温泉の一つ湯の峰は和歌山県本宮町、熊野古道が通る山中の峡谷にあります。一山越えると霊場熊野本宮があるため、古代より天皇・上皇・貴族の熊野詣の湯治場でした。

玄峰老師は、1866(慶応2)年に生まれてすぐ捨てられ、成人してから眼病により失明状態となり、四国霊場はだし参りの途上、行き

倒れた寺で僧になる決心をして得度、厳しい修行を自らに課し、全国に知られる名僧となったのです。三島の龍沢寺が荒れていると聞き、再興しようと入寺したのは1915(大正4)年のことでした。

1961(昭和36)年5月16日朝、三島竹倉温泉で療養中だった老師は病床より這うように起き、正座、渾身一気に「玄峰塔」の大毫を揮われました。亡くなる19日前96歳の絶筆です。

去る9月12日、生地本宮町の人々が中心となりミュージカル「山本玄峰老師の生涯」が元本宮のあった大斎原おのおのほらで上演されました。没後40年近くたち、老師のことを知る人が少なくなってきたため、老師の人徳と偉業をわかり易い形で伝えていこうという趣旨で催されたものです。地元本宮町の人々も多数賛助出演し、大変な賑わいでした。

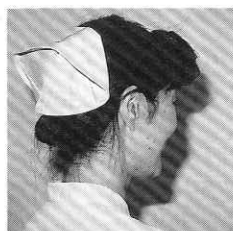
## 企画展「かぶりもの」の見方 11月17日まで開催中

「かぶりもの」は、頭にかぶるものですが、「あたま」の語源に「天玉」つまり身体で天に近いところにある大事な玉という説があります。また「髪」には、「上」であり「神」に通じているという説があります。仏教やキリスト教の像や絵画で、聖人の頭部から光背や後光が出て畏敬を表現するなど、「あたま」「かみ」には霊力とのつながりが古くから感じられているようです。日本でも髪に力があることは、『古事記』にイザミキノミコトがヨミの国へ行ったその帰り、悪霊に襲われるミコトは、黒い蔓（かつら）の髪飾り、櫛をはずして投げて、危機を脱しています。近年まで「くし」や“かんざし”は霊力を持つものとして頭髪を飾っていました。

さて一般に動物は、それぞれ活動環境に合わせた体型を生まれながらにもっていますが、ヒトは無防備です。そのため、環境に合わせて体を衣類でおおい、頭部を保護する必要があります。そのため強い日差しや風、ほこり、寒さを防ぐ「かぶりもの」が生まれました。

一方、「あたま」や「かみ」を飾ることで、その人の権威や地位などのシンボルを表現するのも「かぶりもの」です。つまり古代からある王冠、マラソン競技の月桂冠、さまざまな宗教でも「かぶりもの」が使われています。現代社会でも、駅員、警察官など帽子を見れば、帽子に引かれたラインからその職業の中での地位がわかります。

駅  
長



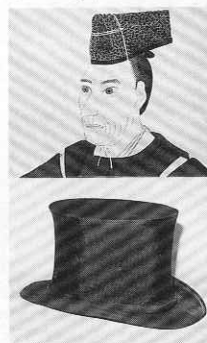
ナース  
キャップ

また、本来機能的だったものが変化し、機能しなくなったものがあります。私たちが目にするところでは、看護婦のナースキャップがひとつの例でしょう。以前は頭部全体をおおっていたものが、時代の中でシンボルとし

て変化していきました。看護婦になるときの戴帽式が神聖であり、テレビのコマーシャルにもその様子がうかがえます。しかし、看護師と職名が変わったこともあり、今後はなくなっていくという話も耳にしました。

「帽子」は、現在ではハットやキャップをイメージしますが、四つに大別されます。その一つは、公武男子の冠の略式である烏帽子の類です。第二は、室町から江戸時代の女

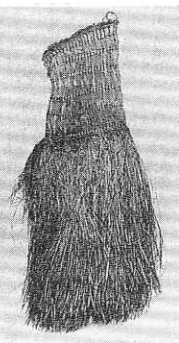
烏帽子



シルク  
ハット



綿帽子



ミノボッチ

子の防寒・外出用で、揚げ帽子・綿帽子・野郎帽子などがあります。揚げ帽子は、ほこりよけだったものが簡略化され角隠となり、また綿帽子も防寒用が変化し、新婦が結婚式にかぶるようになりました。第三は16世紀の南蛮文化と明治の西洋文化が入り、和服に洋帽子というスタイルもあらわれました。婦人帽はおしゃれとして、昭和初期のモガ(モダンガール)の時代に開花しました。第四は、地方の風土に合わせたもので猟師などがかぶる蓑帽子(ミノボッチ)、雪の日にかぶる莫産帽子などがあります。また僧侶のかぶる頭巾は「帽子」と書いてモウスと読みます。

今回の展示を企画して、「かぶりもの」は私たちの生活や風習の歴史から生まれた、さまざまなタイプがあることが分かってきました。近年、帽子は流行としては少なくなってきましたが、日よけ、防寒、スポーツなどの実用装身具として定着しています。また企業の取材の中で、製薬工場、食品工場での、衛生管理、髪の毛一本、チリひとつまで、細心の注意が払われていることを再認識しました。

## てぬぐいかぶり

「日本てぬぐい」は、入浴や洗顔などで体や顔をぬぐうものですが、最近タオルにおされあまり使われなくなりました。

「てぬぐい」の歴史は古く、『倭名類聚鈔』(930年頃)の澡浴具の項に「手巾」とあり、古くから体を拭う用途があったことがわかります。

また「てぬぐい」は、たんに体を拭うだけではなく、神事にかかわるさまざまな用途もっていました。中でもかぶりものとして重要だったようです。『魏志倭人伝』の記述や、古墳時代の埴輪の例から、古代には布を頭に巻く鉢巻のようなかぶり方があったと推測されます。

鎌倉時代以降、武士が軍陣に際して烏帽子の脱げ落ちるのを防ぐために鉢巻をしめたことで、鉢巻は武装の一つとして考えられ、別の発達をとげることになりました。『源平盛衰記』与一扇を射る条に「那須宗高、薄紅梅の鉢巻しめ」とあり、『軍用記』には「鉢巻に二品あり、ひとへ鉢巻、半鉢巻これなり、(中略)大将は必ず紅を用いられる、それより以下は、白にても黒にても用ふるなり」とあり、近世には額に金具をつけ、内部に鎖を仕込んだ鉢巻が作られました。



絵巻にみる鉢巻(『図説太平記』みやこ新聞社より)

これに対して庶民はありあわせの手拭を利用して鉢巻をしました。手拭を細長く折りたたんで頭のはちに巻き、額で結ぶのを向鉢巻、後頭部で結ぶのを後鉢巻といい、折りたたまずにしごいて撚りをかけて、額にはさみ込んだものをネジリハチマキといいます。『嬉遊笑覧』に「鉢巻は男女ともにふるきふり也、

田舎の女は木綿の単なる物を帯したる上に著、鉢巻するを礼服とす」とあり、女子の鉢巻をする習俗は、近年まで伊豆大島や新島などに見られましたが、また頭痛その他の病気や出産に際して鉢巻をする習俗もごく近年まで各地で行なわれていた。

今日では、人とあいさつする場合には、かぶっている手拭いをとるのが礼儀とされますが、前代には来客に際してわざわざ手拭いをかぶるならわしがありました。かぶるのは、相手に敬意を表する礼儀だったのです。正月のもちをつく人に手拭いを配ったり、元旦の若水を組む主婦が真新しい手拭いをかぶったり、神仏に詣でるときにするのは、神聖な行事をとりおこなう礼装だったのです。祭りに奉仕する若衆の鉢巻姿や、神事と関係の深い踊りの手拭いは、手を拭う布片の利用とは別の意味をもつようです。

ときどき、受験シーズンに鉢巻を締めて試験に臨む姿をテレビや雑誌で見かけます。いにしへの風習が、私たちの体に染み込んでいるのでしょうか。



てぬぐいかぶりのいろいろ(『資料・日本歴史図録』柏書房より)



## 企画展「にしきだ村（錦田村）」報告

会期 平成11年3月21日（日）－ 5月16日（日）

会場	郷土資料館 企画展示室
入場者数	14,728人
展示内容	(1) 錦田村の成りたち (2) 錦田の祭りと信仰 (3) 錦田の里の暮らし (4) 錦田の山の暮らし (5) 錦田の教育 (6) 錦田の変化
展示資料	資料 60点、写真 107点
図録作製	A版 60ページ（800円）

今回の企画展は1941（昭和16）年に三島町と合併した「錦田村」という自治体が死語になりつつある今、錦田地域独自の歴史・特性を見直し、将来を考えるよい機会となったようです。

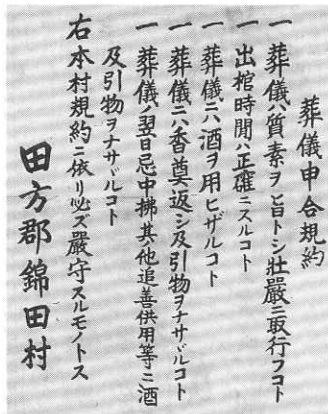
特に各町内会長・神社総代など多くの方が錦田独特の祭りや伝統的生活が忘れ去られるのを惜しみ、積極的なご協力を得ることが

できました。

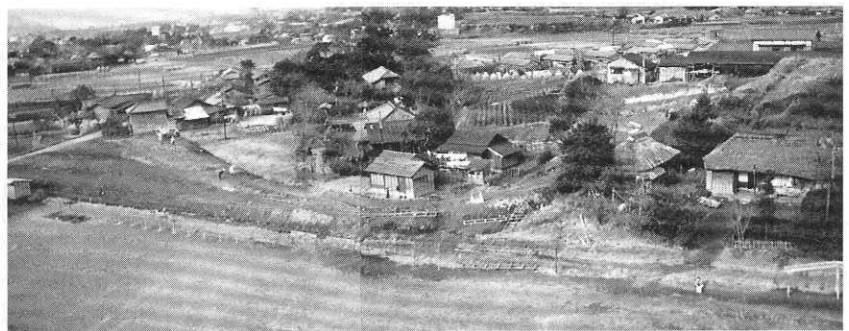
貴重な話を多く伺い、錦田の歴史を伝える各種資料が提供され、充実した展示となりました。昭和初期の資料と写真の他、神社の祭り・講や教育資料が展示の中心となっています。

戦後道路網が整備され、農地の宅地化が進み、家の建て替えなどにより、すっかり様相が変わってしまった錦田地域ですが、展示資料・写真の中に古き良き「錦田村」の時代を見出しなつかしむ年配者の姿を数多く見かけました。

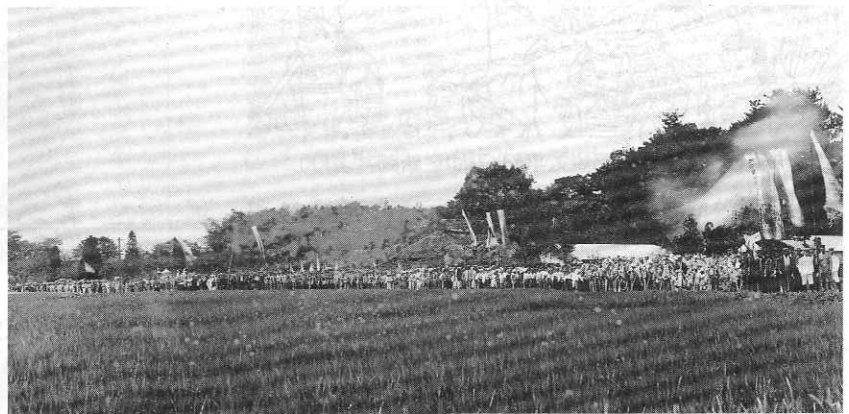
また、錦田小・坂小の6年生も見学に来て、おじいさん・おばあさんの時代の錦田地域を学習しました。田や畑ばかりだった村で農作業の手伝いに励む子供たちの姿をどのようにとらえたでしょうか。関心を持って解説を聞いてくれました。



錦田村葬儀申合規約



錦田小校より西を撮影 1958（昭和33年）年11月

錦田村青年団中支部団旗  
1941（昭和16）年杉山上等兵村葬の葬列  
谷田「ひのや」付近より北東を撮影 1928（昭和3）年8月24日

## むかしにチャレンジ!!(郷土教室)

### 第1回「竹細工づくり」 6/12

講師 竹細工玩具研究家 瀬川到さん  
参加者 10人(小学5～6年生)

竹細工づくりは、「ウグイス笛作り」をテーマに行ないました。まず講師から、ナイフの扱い方について、「正しい使い方をすれば便利な道具なので、使い方を身につけよう」という注意がありました。

さっそく部品となる竹を加工しました。講師がのこぎりの挽き方の手本を示し、そして一人一人が実際にのこぎりや小刀を使って切り出しました。竹はスジが強いので刃物がすべり、削るのが難しかったようですが、慎重に扱ったのでうまくできました。



次に自分たちで加工した部品を組み合わせ、一番音のよく出る位置を見つけ、そこを講師に確認してもらってから、接着剤で固定し、自分の「ウグイス笛」が完成しました。

最後に全員で会場を掃除して、ウグイス笛を手記念写真を撮り、講師にお礼を言って無事に終了しました。

今回の工作物は音が出るということもあり、受講者も気に入ったようで、楽寿園の中をにぎやかに帰っていきました。



### 第2回「昔の道具を使ってみよう!!」7/10

講師 郷土史家 鈴木辰己さん  
参加者 30人(小学4～6年生)

今回は資料館の資料を実際に使って、使い方や昔の人の生活を体験する教室です。講師より石臼を実際に使用していた頃のお話があり、さっそく石臼のまわりに参加者を集め、大豆の挽き方を実演しました。



子どもたちも石臼で大豆を挽いて、きな粉を作っていました。始めはおそろおそろ、そして、次第に慣れていきました。きな粉は一度挽いただけでは粒が細かにならないため、ふるいにかけて、また石臼にかけて細かくしていく作業を繰り返しました。努力の成果は大きめのボール2杯分になりました。またあわせて、大根おろしを作っていました。

その頃、朝から蒸していたもち米も炊き上がりました。もち米を臼の中に入れ、スタッフでもち米を少々杵でつぶし、そしてもちを



つきははじめました。参加者の多くは幼稚園のころ経験したとのことですが、一人前の杵を子どもたちは元気よく持ち上げてつき、手がえしに挑戦する子もいました。ついたもちには取り粉をつけ、ちぎりました。

そして、きな粉や大根おろしを自分たちの好みに味付けし、自分たちですべて作り上げたおもちを味わいました。

## 夏の郷土学習 「巨木名木めぐり」8/18

講師 市文化財保護審議委員 高島勝さん  
参加者 18名 (小学5～6年生)

スタートは楽寿園で、「いこいの松」(樹齢約350年のアカマツ)をはじめ小浜池や楽寿館の歴史なども合わせた説明を受けました。

三嶋大社では国指定されている樹齢約1200年のキンモクセイ、樹齢約1000年の御神木のクスノキを中心に大社内の古木を見てまわりながら説明を受け、大社に関するいろいろな話を聞かせていただきました。



御園の神明宮では樹齢約300～500年のクスノキ数本、約300年のイヌマキ数本、玉沢妙法華寺では約300年のスギ数本樹齢約200年のヤマザクラと、見てまわりました。

午後は山中城内にある駒形諏訪神社からスタートしました。この神社には山中城築城当時からあった県文化財のアカガシと「矢立のスギ」と呼ばれるスギの大木があります。それらの説明を受け、同じく山中城内にある宗閑寺まで歩く途中、山中城の歴史についても説明がありました。

最後は佐野にある見目神社。ここには樹齢約500年のイタジイと約300年のコガノキがありました。

今回の講座では暑い中での講座となりましたが、子どもたちは元気よく、そして真面目に講師の話を聞いていました。



## 西小学校郷土資料室オープン!!



西小学校に「郷土資料室」が誕生しました。小学校の余裕教室の有効利用に、郷土資料館の収蔵庫に寄贈されたまま眠っている資料を学校で活用してもらおうと企画しました。

この郷土資料室には、日本の主食お米をつくる道具として、馬鋤・除草機・唐箕とうみなど、また昔の生活道具として、行火あんか・行灯あんどん・火のし・火鉢など、そして昔の学校の教科書などを展示しました。7月1日にオープンとなり、初日には小学3年生を対象に、資料室内の展示資料の扱い方について生徒に資料を触れてもらいながら、説明しました。生徒たちは、歓声を上げながら珍しい道具に触ったり、のぞきこんでいました。



昔の道具は、安全性に欠け、さびたり材質が弱っていることもあり、資料の取り扱いには安全を考えて、「自分が怪我をしない、他人を怪我させない、資料に無理な負担をかけて壊さないこと」をアドバイスしました。

今後、生徒に触れたり動かしたり実際に使いながら、大切に扱って、昔の道具に親しんでほしいと思います。



## 平成11年度 今後の予定

### 企画展

平成12年1月3日～2月27日 「富士・愛鷹・箱根山麓の縄文時代」展

近年めざましく研究の進んでいる縄文文化を、私たちの富士・愛鷹・箱根の遺跡から、「山のムラ・海のムラ・縄文人の祈りや信仰」をテーマに紹介します。

平成12年3月19日～5月28日 「なかざと村(中郷村)」展

企画展「きたうえ村(北上村)」「にしきだ村(錦田村)」に続き、昭和29年に三島市に合併した中郷村の歴史・民俗・文化財とその変貌を広く紹介いたします。

### 講座

平成11年11月13日(土) 第4回 郷土教室 「昔の道具を使ってみよう～秋」

講師 鈴木辰己さん(郷土史家) 対象 小学4～6年生

収穫の秋です。収穫したお米がどのようにしてご飯になるのか、昔の道具を使ってみよう。さあ、おいしいご飯が食べられるかな。

◎応募方法 ハガキ・FAXで、氏名、住所、郵便番号、電話番号、学校・学年を書いて資料館まで送ってください。締め切りは11月4日。

平成12年1月22日(土) 講演会 「千枚原遺跡と縄文時代のまつり」

講師 瀬川裕市郎氏(沼津市歴史民俗資料館 学芸員) 対象 一般

開演14時 三島市民生涯学習センター 3階 講義室

企画展「富士・愛鷹・箱根山麓の縄文時代」の関連講演会として、三島の代表的な千枚原遺跡を取り上げ、発掘された土偶、石棒、埋甕から、縄文人の信仰を探求します。

## おねがい

来年春に企画展「なかざと村(中郷村)」を開催します。旧中郷村についての写真や絵図、中郷村時代を表す資料(役場などの文書、印刷物)、また移り変わる町並みの写真など、お持ちの方はぜひご一報いただきたいと思ひます。

これまで開催した「北上村」、「錦田村」の締めくりとなります。中郷村と関係資料を紹介する図録も作製いたしますので、どうぞご協力ください。

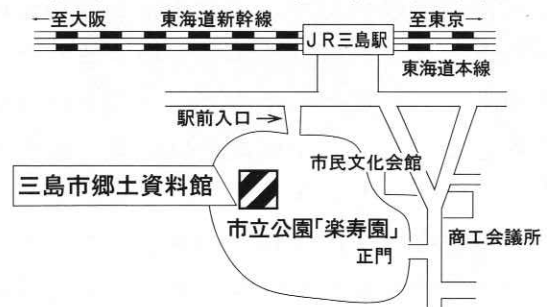
### 郷土資料館のホームページ

郷土資料館でもインターネットで資料館の案内や行事報告、三島の歴史や文化を掲載しています。現在は仮運営ですが、早ければ年内に、市役所のホームページからお届けいたします。その際にも、以下のURLでお知らせいたします。どうぞご覧下さい。

URL:<http://www2u.biglobe.ne.jp/~haraq/>

### 利用案内

休館日 毎週月曜(祝日の時は翌日)  
12月27日～1月2日  
開館時間 午前9時～午後4時30分(11/1～3/31)  
入場無料(但し、楽寿園入場の際、有料)



三島駅(南口)から徒歩5分。市立公園楽寿園内

### 郷土資料館だより No.64

発行日 平成11年(1999)11月1日  
(年3回発行)

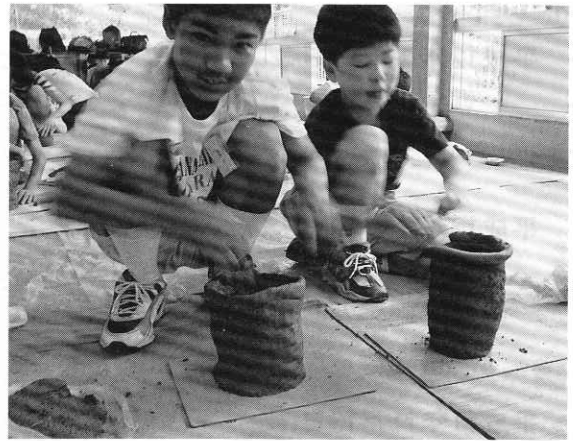
編集 三島市郷土資料館  
〒411-0036 三島市一番町19-3  
楽寿園内

TEL 0559-71-8228  
FAX 0559-81-3730

発行 三島市教育委員会

## 夏休み恒例 縄文土器づくり教室

初日7月27日は、「土練り」の作業です。はじめに資料館の縄文土器を手にしなが、縄文時代の生活を解説しました。そして屋外に出て、一人分の粘土(テラコッタ)2kg、千枚原の赤土1kg、砂0.8kgを混ぜ合わせ、水を加えながら約2時間練っていききました。単純な作業なので根気、またコツを知るまで力が必要で、炎天下だったこともあり、途中で手が離れることもありました。スタッフも協力したり、アドバイスをし、土を練り上げていきました。そして資料館内に成形までの間保管しました。練りから一日おくのは、テラコッタという粘土の中の水分が赤土や砂の中に入り、一様に粘りが出るためです。



2日目7月29日は、「成形」の作業です。朝方雨模様で、降水確率も高かったため、楽寿園無料休憩所での作業にしました。ねばりけの出た粘土をまずひも状にのぼし、それを積み重ねながら、継ぎ目を密着させて形作っていきました。子どもたちはいろいろなデザインの土器に縄や貝で模様を入れていきました。土練りが足りなかったのか割れたり、バランスを崩してつぶれたりすることもありましたが、根気よく初めからやり直し、全工程を終えることができました。



3日目、約一ヶ月陰干しした8月25日は、最後の工程「焼成」です。午前中は炉囲いの中でから焼きをし、置火を作っていました。残暑の厳しい作業だったので、火のそばは相当の暑さでしたが、子供たちは元気に薪を火の中に投げ込んでいきました。午後によく土器を置火の中に入れていきました。そしてその上に薪を重ねていき、燃えさかる炎の中、子供たちは「割れないで、上手に焼けるかな」と不安そうに話しながら見ていました。火を落とし取り出した土器を見て、出来具合のよさに喜びの声をあげていました。今年の土器は例年以上に出来がよかったようでした。自分たちの作った縄文土器にみな満足して、持ち帰って行きました。



### 今年度 資料館スタッフの紹介

館長 杉村 斉  
事務 畑中めぐみ 関 洋和  
学芸員 福田淑子 竹之内修(囁話)

春の異動等でスタッフが入れ替わりました。以上のメンバーで運営していきますので、よろしくお願いいたします。